

母校に於ける小泉八雲先生：追懷

著者	村川，堅固
雑誌名	龍南
巻	2 0 0
ページ	4 0 - 4 1
発行年	1926-12-25
その他の言語のタイトル	母校に於ける小泉八雲先生：追懷
URL	http://hdl.handle.net/2298/8899

母校に於ける小泉八雲先生

村 川 堅 固

予は江口と同時に五高當時の第五高等中學校に入つた者であるから、江口の想出は、同時に予の想出である。江口とは随分懇意でヌシ、オリの間柄であるが、江口が筆マメに其當時から日記を付けて居たことは、チツとも知らなかつた。其日記に基づいた龍南古事記を讀んで、予は疾くに記憶から失つて居た當年のことを想ひ出して、感慨に耽つた。筆不精な予には、逆も江口の様な精細な古事記は書けぬ。が、赤星が是非何か書けといふから、朦朧なる記憶を辿つて、古事記の記さないことを少し書いて見よう。

今では押しも押されぬ世界の文豪小泉八雲先生は予等の在學當時五高の先生であつて、予等は文法やら、英作文などを教はつたものだ。其頃はヘルン先生と呼んで居て、今の様にハーンとは呼ばなかつた。又小泉八雲といふ名もまだ多く知られて居なかつた。先生の教授法は一種獨得のものであつた。例へば文法を教へらるゝにも教科書を用ひらるゝでなし、又口授筆記をさるゝでなし、教場に入られて、出缺をつけらるゝ。それからクルリと振り返つて、黒板に向ひ、チョークを取つて、左の上の隅から文法を書き始められる。生徒は黙々としてそれを寫す。其の書かるゝのは些の滯滞なく、時間の終りの鐘のなるまで續く。鐘が鳴ると一禮して退出さるゝ。かくして寫し來つた筆記帳を放課後讀んで見ると、秩序整然、而も日本學生に取つて最も適切な文法上の注意が與へられて居る。先生は一片の原稿もなく、全時間些の淀みなく書き續けられ、然もそれが極めて整つたものであつたのは驚くべき技倆と思ふ。これは先生の天稟の文才もあつたらうが、教場に出らるゝまでには、頭の中で十分練つて來られた事と思ふ。

その後英文學史を教はつた時も、全然此流義でやられた。然も英文學史は文法の場合よりも、一層先生の文才を發揮せられたことは、勿論である。予が龍南會雜誌委員をして居た時、先生に寄稿を依頼したことがある。先生は快く之を引受けられて、書いてやられ原稿を見ると題は Future of Japan といふのであつて、其主旨は日本は日本固有の美風を飽くまで維持しなければならぬ。徒らに歐米に摸倣してはならぬ。日本の未來の盛衰は、日本の美風を維持するか否かに懸つて居る。支那人の長所は猥りに其國風を改めない點に存する。生活様式の如きも、日本人は日本風を守るがよいと言ふのであつた。此論旨は現代の日本人に採つても頂門の一針と思ふ。先生の書風は、寧ろ読み易いものではあつたが、それでも當時の幼稚なる熊本印刷所では、先生の原稿を渡しても、とても組めないもので、予は一字々々を離して、恰かも印刷した様に先生の原稿を寫して、印刷所に渡した。さうして印刷された論文は龍南會雜誌の早い處に載つて居る。若し今でも雜誌が初號から揃つて、母校に残つて居るなら、搜して一讀してもらひたい。その先生自筆の原稿は久しく予の手許にあつたが、東京へ出たあとで、遂に紛失した。今日先生の自筆は、非常に貴重で、歐米に於て斷翰零墨も數千金を値して居る。さういふことを豫想したら、右の原稿を早く母校に送つて保存の道を講ずべきであつたが、今になつて残念でならぬ。